小松の宝塔さん「ほうとうさん」について

宝塔（ほうとう）：仏塔の美称

小松の南面に面する小路に【宝塔さん】と呼ばれる墓地があります。
小松部落内で、無縁墓を祀る墓地として昔から存在していたようです。
戦国時代（室町～安土桃山時代）まで遡りますと、この地も例外でなく、少弐氏、大友氏、龍造寺氏や、配下の菊池氏、犬塚氏、江上氏等の地頭よる国取合戦の影響を受けていました。当敷地付近は入り江であったこともあり、墓地付近には約 300 体の遺骨が眠ると言われています。
また明治 7 年【西暦 1874 年】に佐賀の乱がおこります。この時の最後の戦いが佐賀城外の境原（さかいばる：神埼郡千代田町）が決戦の場になります。この戦で、この地で息絶えた無名戦士のご遺体を小松の村人が収拾して、この墓地近くに埋葬されたとも伝わります。

時代は変わり、明治中頃からこの墓地に隣接して、小柳整骨院がありました。
ここである事件がおきました。小柳整骨院に奥様の治療の付添に来られていたご主人様（長崎の方）が、同院の東側のクリークのカワジで洗濯をされておられた同院の女中さんを水鳥（カモ）と誤って猟銃で射殺されるという事故が発生しました。
その方は、自首して服役されましたが、服役半ばに自殺されたとお聞きします。その方が、その償いとしてこの墓地を整備されました。

小柳整骨院の二代目が小柳小太郎さん（養子：黒津出身）で、奥様がおぬいさんといわれました。奥様は唐津のご出身の方でした。
おぬいさんが法華経の信仰の深い方で、嫁がれてから以後、墓地が隣接していることもあり、お参りと保守をされるようになりました。
また、仏塔と石灯籠を建立されました。
このころから、この墓地を宝塔（ほうとう）さんと呼ばれるようになりました。

また昭和 30 年代中旬、小太郎さん・おぬいさんのご子息であられる文人先生・幸生さんご兄弟の小柳記念病院が諸富町で開業され、九州屈指の救急指定病院（脳神経外科が有名）として発展しました。昭和 50 年代に小柳記念病院より現状のような形に整備がおこなわれました。

佐賀の乱
明治 7 年 2 月に江藤新平【征韓党】・島義勇【憂国党】らをリーダーにとして佐賀で起こった明治政府に対する士族反乱の一つで、佐賀士族軍は岩村高俊【岩村通俊の実弟】が率いる海兵隊と士族招集兵で編成した熊本鎮台部隊の政府軍と交戦した。佐賀の乱における政府軍の死者は大部分がこの戦闘におけるものといわれる。しかしその後、文官でありながら兵権を握る権限を得た内務卿大久保利通が直卒した近衛兵や鎮台兵などが次々と戦線に投入されると劣勢を余儀なくされ激戦の末に鎮圧された不平士族による初の大規模の反乱です。これ以後、神風連【熊本】の乱、秋月の乱、萩の乱、西南戦争等が西日本各地で、そして東北地方でも士族の反乱が相次ぎました。尚、江藤新平は大久保利通グループの最大の政敵とされていて、確執がありました。佐賀の乱後、大久保利通は急遽に設置した臨時裁判所において権大判事・川野敏鎌に審議を行わせ、わずか 2 日間の審議で裁決がおこなわれました。江藤らの裁判は当初から刑が決まった暗黒裁判で、答弁や上訴の機会も十分与えられなかったと言われています。江藤・島は死刑に加えさらし首にされました。当時、大久保利通の個人的感情が江藤らの裁決に復讐の性格を与えたという噂が国民に広がりました。明治政府の司法制度を自らが作り上げた江藤本人が、その法律で昔の部下である川野敏鎌にこのような裁判で進行されたことが非常に無念に思ったとの伝が残されています。
確執の理由を考えます。江藤新平は頭脳明晰で有能な官吏であったことは間違いないようです。
佐賀人は幕末戦争の時に血を流していないことがあります。薩長の多くの優秀な人材が幕末時に失われたのに対して、佐賀には優秀な人材が生き残っていたため、大久保利通は薩摩の幕末時の功績に値する利権を残すことにどうにかしなければならない使命を持っていたと考えられます。佐賀の乱は大久保利通の私戦と言っても良いぐらいの、江藤軍が準備もなく弱いことを知っていて合法的に殺しに行ったということかもしれません。江藤新平の帰郷のことを【大久保利通にはめられた江藤新平】【飛んで火にいる夏の虫】と評した文献もあります。